

空の上のないしょばなし

秦野市立つる巻小学校 伊東 千織

ある日、雨と雲がお話をした。

雨が言った。

「ぼくはすごいんだ。いろんな所にふって、みんなに水をとけていているんだ。」

と、自まんする。すると、雲が

「いやいや、わたしの方がすごいよ。わたしが雨を作っているんだよ。」

と、こちらも負けはない。

二人が言いありそ。ていると、風がビューとわりこんできて、

「二人とも、言いありそうのはやめて、わたしに乗って下の世界を見に行。てたしかめてみたりどう。」

と言った。二人は風に乗ってシューと地面に下りて行った。

「じゃあまさは、セネガルの家を見に行。たりどうかしら。エルバリン村には雨を使。てくらす家があるわ。」

「家が見えて来たよ。」

「なんかピラミットがさがさになっ、たみたい
な屋根だね。」

「あれで雨をためるんだ。ここは井戸をほっ
ても塩からい水しか出ないから、屋根で雨
を集めて大切に使う。いるんだよ。」

二人はまた風に乗り急上昇した。

「次は、日本に行ってみようか。」

と、楽しそうに言った。

「ああ、山にかこまれた町が見えて来た。」

「ここは秦野という名水の町なんだよ。」

風はパツと上がると町中にいくつもあ
る、あき水をめぐった。

「とう明てすぐきれい。」

「ここでもみんなが水を大切にしているね。」

「あき水も実は雨なのよ。山にふった雨が、
地面にしみこんで、七年から八年かけて地
下水になっ、てそれがあき出ているのよ。」

と風が教えた。

「ほく、て色んな所にふっ、ているんだね。」

「でも雨がふらなくて困。ている所もあるの。
「そうか。全部の所にふ。てあげたいのに。
と雨が心配な顔をして言った。すると雲が、
「雨のふらない所に行。てふらせてみる。
と、ひらめいた顔で言った。二人は風に乗
雨のふらないさばくのアフリカ大陸に行。た。
雲はすぐに雨をふらせた。雨は地面にポツ
ンと落ちた。でも、

「あれ、すぐかわいてなくな。ちやうよ。
「これじゃあ何度ふらせてもだめだね。昔は

「ここも緑だ。たのになあ。

と風は少しさびしそうに言った。

「人間が地球の空気をよごしているから……」

風の言葉に二人は考えこんでしまった。雲が

「でも、人間も努力してくれているかな」

と、元気を出して言った。雨も、

「そうだね。人間も努力してくれているなら

ほくたちもがんばらなくちゃ。けんかして

る場合じゃなか。たね」

「地球をみんなて守るぞー。おー」

ポトン。

レイン

プリユイ

ジョビア

ムブア

マタル

わーい、おっ、たー雨だー